『國民新報』1939年12月10日

[主張]　總動員の限度[[1]](#footnote-1)

　やとふは、んにはれてて、でも、でもんどかないことはないとふであるが、のとして、一つのをるきれると、にたこがて、めていたのがしてるものである。やのもにそのにしたのではないかとふ。りとすれば、それこそはゝしきである。

　はこれからである、だからもこれからである。とばれてたからがまつたのであるが、がにぶにんで、のがし、にそれが、にするや、のは、のするにつた。しながら性の、はして、これでつたではない。がんでるところのとふが、はとつたなてはにをなかつた、なをんだによつてきかへられるのくないとふことをすることは、してのないことではない。

　のとふのには、にとふがされたであるが、のびそれにつてるところの、へばソのはきてのないことであり、にのみをてても、がをびるはもあるのである。かくじれば性のはだだとはねばならない。

　にしたものがである性のにして、のさや、さやさがさるべきはのである。されば、ふところのは、だだのではなくて、ろの準備であるとへる。これをにいてても、さうである。やつと持場のや國がされただけで、とでもはうか、だのにさへってないである。にがい[て]たのが、つひこのころで、をしてやつとこれをじたであるから、のがするのは、々これからとねばならぬ。これにじて、ののまでも、で、の、それこそなにるのは、のことであらう。

1. この文章は単行本『同胞に告ぐ』には収録されていない。 [↑](#footnote-ref-1)